

研究発表1 -

不登校・家庭内暴力を呈した発達障害児に犬介在療法・院内学校などが奏功した例

森但臣¹⁾ 奈良岡妙子¹⁾ 伊藤恵理²⁾ 市嶋優紀³⁾ 太田耕平⁴⁾

1) 看護師 2) 心理士 3) 作業療法士 4) 医師・名誉院長

医療法人 耕仁会 札幌太田病院 ストレスケア病棟

1. はじめに

アニマルセラピーでは「思春期への教育的効果」や「犬は子供を批判しない為に、子供が自分自身を受け入れられるようになる」²⁾とされている。当院では、平成23年11月から「太田式犬介在療法」を導入した。今回、不登校・家庭内暴力などを呈した発達障害児に対し、従来からの院内学校、小弓道療法、チャンバラ療法などに加え、太田式犬介在療法(以下、犬介在療法)が奏功した症例を経験したので報告する。

2. 症例紹介

A男、14歳(中学2年生) 病名:自閉症障害(薬剤使用無)。母・A男の2人家族。A男3歳時、児童相談所から知的障害、自閉症の傾向を指摘された。同時期父母離婚。父とは小学高学年頃から交流なし。小学・中学校は、特別支援教室に登校。A男中学時、X年同じ教室の上級生に叩かれたの機に不登校となった。その頃から、イライラした際に扇風機、物干し竿を投げたり、母の顔や頭を叩く行為が出現した。興奮時に暴れて消火器を持ち出し、警察沙汰にのなった。母が児童相談所に相談し、知的障害者の短期ショートステイを利用した。退所時、母が本人を連れて当院に来院、入院となった。

3. 入院治療・看護の経過

1度目の入院:入院時、入院治療に納得せず、母への暴言があった。また、女性患者への迷惑行為がみられたために多職種でカンファレンスを開いた。入院治療では、小弓道療法などの遊び療法を通し、入院治療への不安、抵抗を軽減すること、男性職員の父性的指導を通し規則正しい生活を獲得すること、院内学校での勉強を通し、学力回復、向上から自信を獲得すること、を目標とした。犬介在療法は、治療開始後に追加した。小弓道療法には、積極的、かつ真剣に参加した。感想を言語化するのは困難であったが、ニコニコとしていた。更に、犬介在療法では、初めは恐がったが、次第に「犬に触るの初めて」と話しながら積極的に犬と関わり、病棟内を散歩などした。入院10日目より学校の協力を得て、当院から母の送迎にて登校を開始した。入院27日で退院した。

2度目の入院:退院後、再度不登校となり家で暴れたため、退院から約20日間で2度目の入院となった。入院1日目から、母の送迎により登校。入院2日目から単独で登校を開始し、「学校は楽しかった」と話した。一度、クラスメイトとのトラブルがみられたが、病院・学校間の情報の共有、連携、協力から、深刻化せずに解決した。

また、親しくしてくれる女性入院者に対して、再度迷惑行動があったため、前回同様に生活指導、院内学校、各種治療プログラムを通した男性職員の父性的な指導を行った。以上により、他入院者への迷惑行為は沈静した。更に犬介在療法で犬と触れ合い、表情が穏やかになり、笑顔が増えた。母と児童相談所と連携し、退院後は支援施設への入所が決定し、約3カ月で退院となった。

4. 考察

本例の背景には、知的障害の他、母子家庭のため父性が欠如した家庭機能不全があった。入院治療では、男性職員を中心に父性的に関わった。また、小弓道療法、犬介在療法、院内学校などを通した遊び、学びにより情緒が安定し、興奮・暴力・迷惑行為は沈静した。

研究発表1 -

太田¹は「努力、忍耐 辛い 褒められる うれしい。すなわち努力や忍耐する事が褒められなくても好きになり、それが出来る自分に自信が出来、さらに高い目標をもつようになる」と記している。今回、父性的な指導から「努力・忍耐 辛い」を体感し、各プログラムや学習指導で「褒められる」経験をした。更に犬介在療法により、愛情や優しさ、自分を頼る存在への慈しみ、命の尊さなどを学び、「可愛い」などの癒しが改善に役立ったと考える。横山ら²は「アニマルセラピーには生理的、心理的、社会的利点が存在する」と言っている(表1参照)。リラックス効果、肯定的感情と心理的自立の促進、教育的効果、などの作用により、他者を思いやる情緒的成長となる。上記の治療の相乗効果により登校が可能となり、暴力の沈静に奏効したと思われる。知的障害があり、理解力が低いこともあるため今後も長期的な観察を行い支援する必要がある。

5. おわりに

不登校の背景に、学校・家庭間のいじめられ体験が要因となり得る。そのような心的外傷を持った児童に対し、今後も犬介在療法を通した慈愛、癒しを与えていきたい。

参考文献

- 1 太田耕平 1995 幼児から高齢者までの心の発達 十段階心理療法(P195~196)(第5版 三誠社)
- 2 横山章光 2002 アニマルセラピーとは何か(P35,53)(第5刷 日本放送出版協会 東京)

表1

<p>生理的利点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)病気の回復・適応、病気との闘い 2)リラックス、血圧やコレステロール値の低下 3)神経筋肉組織のリハビリ(特に乗馬療法) <p>心理的利点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)元気づけ、動機の増加、活動性(多忙)・感覚刺激 2)リラックス、くつろぎ作用 3)自尊心・有用感・優越感・責任感などの肯定的感情、心理的自立を促す 4)達成感(特に乗馬療法) 5)ユーモア、遊びを提供する 6)親密な感情、無条件の受容、他者に受け入れられている感じの促進 7)感情表出(言語的・非言語的)、カタルシス作用 8)教育的効果 9)注意持続時間の延長、反応までの時間の短縮 10)回想作用 11)自分との境遇と重ね合わせる <p>社会的利点</p> <ol style="list-style-type: none"> 1)社会的相互作用、人間関係を結ぶ「触媒効果・社会的潤滑油」 2)言語活性化作用(スタッフや仲間との) 3)集団のまとまり、協力関係 4)身体的、経済的な独立を促進する(盲導犬、聴導犬) 5)スタッフへの協力を促す
